ウフエ・ボワニ大統領の死

原口武彦

はじめに

1993年12月7日，午前6時35分，コートジボワール国大統領フェリックス・ウフエ・ボワニは，生地ヤムスクロで現職のまま88歳の生涯を閉じた。奇しくもこの日は同国の33回目の独立記念日であった。このアフリカ政界の最長老の訃報は，日本の新聞ではわずか数行の扱いにとどまったが，お膝元というべきフランスでは『ル・モンド』紙（12月9日付）が3ページをさいて彼の生前の業績を総括し，イギリスの『タイムズ』紙（12月8日付）も半ページの追悼記事を掲載している。

後継者問題

死去の18日前にあたる11月19日，ウフエ・ボワニは，療養先のジュネーブから担架に乗せられたまま特別機でヤムスクロに帰り着いた。これまでとは異なり，事前の発表もなくしたがって歓迎行事も一切ないひっそりとした帰国であった。そのことによって，だれもがもはや彼に再起の可能性はなくなったことを感知した。そして焦点は，目前に迫った彼の死去後，だれが大統領職を継承するのかという問題に移った。

憲法の規定（第11条）に従えば，国民議会議長であるコナン・ベディエがウフエ・ボワニの任期終了（1995年10月）まで，大統領職を引き継ぐことになる。しかし90年11月，一党制下の最後の国民議会で改正されたこの第11条（改正前は，国会議長が引き継ぐ大統領の任期は60日間で，その間に新大統領選出のための選挙を実施することとなっていた）に関しては，民主主義政治の理念に反するという疑義が，最大野党FPI（イボワール人民戦線）のバボ書記長をはじめ，政府与党PDCI（コートジボワール民主党）の一部からも提示されていた。また大統領が死去した場合，大統領職の継承を法的に認定することになっている最高裁判所は，93年春に汚職で前長官が辞任して以来，前述の後継者問題もからんで後任者の人選が難航し，長官を欠いたままであった。

他方，コナン・ベディエの対抗馬として急速に頭角をあらわしてきたのはアラサンヌ・ワタラ首相であった。1990年春の政治危機（本誌　11号参照）を複数政党制への移行によって収拾し，その複数政党制のもとでの初めての大統領選に勝利したウフエ・ボワニ大統領は，新設した首相のポストに，BCEAO（西アフリカ諸国中央銀行）総裁であったアラサンヌ・ワタラを抜擢した。以来，ワタラは，ようやく体力の衰えをみせはじめたウフエ・ボワニの腹心の部下として「能吏」ぶりを発揮し，彼をウフエ・ボワニの後継者として期待する声は日

増しに強くなっていた。後継者はこの二人のいずれかにしぼられてきた観があったが，両者の争いがどのような形で決着をみるのか，状況は日増しに緊迫の度を高めつつあった。

コナン・ベディエの勝利

しかしこのような懸念に反して，ウフエ・ボワニ死去後の事態の推移は，少なくとも表面的には平穏かつ迅速であった。

12月7日早朝，ウフエ・ボワニ死去数分後には，アビジャン市のワタラ，ベディエ両氏のもとに電話で訃報が届いた。両氏はともに，とりあえず同日朝，独立記念日式典として大統領官邸前で予定されていた儀丈兵の閲兵式に臨み，その足で直ちに弔問のためワタラ首相は特別機で空路，ベディエ議長はそれとは別に陸路，アビジャン市から240キロのヤムスクロ市に向かい，すぐその日にアビジャン市に戻った。

そしてワタラ首相は昼のテレビニュースに出演し，自らウフエ・ボワニの訃報を死去の正確な時刻も附して内外に発表する。続いて夕刻5時には緊急閣僚会議を召集し，政府は憲法の規定に従って大統領空位の認定を最高裁判所に付託すること，最高裁の認定があるまでは，現内閣は執務を続行することを決定する。この閣議決定は，ミルモン情報相を通じて夜8時のテレビニュースで国民に発表することとした。

他方，ベディエ議長のヤムスクロ弔問からアビジャンに戻ってから夜までの行動は不明である。しかし，夜8時のテレビニュースが始まる直前，彼は30名あまりの憲兵隊に守られて，突然国営テレビ局に現われた。そしてテレビを通じて「憲法の規定に従って……この瞬間から……私は国家元首の責任を引き受ける」と宣言した。この短いが決然としたコナン・ベディエの演説に続いて，キャスターはフランス大統領ミッテランから送られた弔電を朗読する。その宛名は「コナン・ベディエ，コートジボワール国大統領閣下」となっていた。テレビ局はワタラ首相の指示で，国家警察陣によるそれなりの警備体制がしかれていたが，ベディエ議長のこのようなかたちでの来局は予測していなかったためか，彼らの進入は制止されることはなかった。

コナン・ベディエ陣営がこのミッテラン大統領の弔電をどのような手順で準備したのかは不明であるが，コナン・ベディエは最高裁の認定を待ちきれず，まずフランス政府の認定をもって自らの大統領就任宣言を権威づけようとしたものと考えられる。そしてこのコナン・ベディエ側の奇襲作戦ともいえる手ぎわよい行動で，ワタラ首相側と衝突も起こすことなく，権力抗争の第一幕はあっけなく方がついた。

翌8日付の『フラテルニテ・マタン』(政府与党機関紙)には，第一面にコナン・ベディエの大きな顔写真と前述の彼の短いテレビ演説の全文が掲載された。ワタラ首相によるウフエ・ボワニ死去の公式発表と閣議決定の内容は，最終ページに初代大統領に就任した当時55歳のウフエ・ボワニの写真とともに小さく事務的に掲載されるにとどまった。

9日には，遅ればせながら最高裁もクレピィ長官代行のもとコナン・ベディエ国会議長の大統領就任を認定し，ワタラ内閣は総辞職する。翌10日には，ベディエ大統領はワタラ内閣時代の経済問題担当相ダンカンを首相に任命，24名の閣僚からなる新内閣が15日に発足した。

ウフエ・ボワニの思想

1985年10月，ウフエ・ボワニは政府の公式発表

によれば，実に100％という前代未聞の得票率で，大統領6選をはたした。その直後，彼は内外の記者200名を前にして，延々5時間半におよぶ「どんな質問もタブーではない」記者会見を行ない，自分のこれまでの政治活動をふりかえるとともに，当面する内外の諸問題についての自分の見解を表明している。その時の彼の発言の中から，ウフエ・ボワニらしいと思われるものを抜粋して紹介しよう。

後継者問題

「アカン語族――私もその一人だが――の世界では，死者には発言の権利はない。遺言という制度もない」。

結局，彼は死に至るまで後継者を指名しなかった。

南アのアパルトヘイト

「ブラック・アフリカ内部にもアパルトヘイトは存在する。あなたの同胞が……偉大な学者あるいは大金持ちであろうと，その人が口承伝承の守護者いわゆるグリオなどの家系の者であるならば，あなたは自分の最もみすぼらしい娘でも彼らのもとに嫁ぐことを容認しないだろう。われわれがこれを廃止するまではまだ何年もの年月が必要であろう。アパルトヘイトの問題は軽々しく論じてはならない」。

「私は，（1975年に）ドナ・フォロゴ情報相を（南アに）派遣した。フォロゴは自分の白人の妻と，混血の次官－南ア国民を構成する3要素－を伴って出発した。彼は南アの白人政府当局から歓迎をうけた。しかし彼はソウェトの黒人同胞とも接触することも要請した」。

アパルトヘイト体制の廃棄の意志を表明したデクラーク大統領が訪問した最初の黒人国はコートジボワールであった。1991年，ユネスコが設立したウフエ・ボワニ平和賞の初の授賞者には，マンデラとデクラークの両氏が選ばれた。

部族と国家

「幾世紀もの年月をかけて建設された多くの国家が存在する。国境は歴史の傷跡のようなものである。どんなに優れた美容師もこれを簡単に消すことはできない」。

「ヨーロッパ人たちは，われわれアフリカ人の土地をバルカン化したと非難されても，そのことに罪の意識を感ずる必要はない。それは真実ではない。われわれを一つにまとめあげたのは彼らなのだ。植民地化前，コートジボワール国は存在しなかった。ガーナ国も存在しなかった。異なった言語，慣習を持つ諸部族が存在していただけである。植民地化がそれらをまとめあげたのだ。そしてそのグループが独立し国家となった。これらの国家（の国民）が一つの民族（Nation）となるまでの道のりはなお遠い……。われわれは60の部族からなる。……民族は〈イボワール民族〉と口先でいうだけでできあがるものであろうか。否，それは息の長い仕事である」。

彼のこのような認識が，1990年までコートジボワールに複数政党制の導入を時期尚早として拒否する論拠となっていた。

フランス共産党と独立運動

「われわれは（フランス）共産党グループと戦術的に同盟を組んできたが，われわれの目的は同一ではなかった。われわれは植民地体制に対して戦っていた。フランス共産党員もフランス国民の一部である。……われわれが立ち上がったのは，フランスの存在そのものに対してであって階級闘争の政治のためではなかった」。

1951年，ウフエ・ボワニが率いるRDAがフランス共産党と訣別，ウフエ=ミッテラン協定に従って，フランス政府との協調路線に方向転換したことに対するウフエ・ボワニの説明である。

対　話

「私はわが国の河川に棲息する最も大きい魚キャピテンのようなものだ。この大魚も川から引き上げられたら，陸に上がった河童同然だ。私も国民から離れたら何もできなくなってしまう。私は常に国民の声に耳をそばだてている」。

大きな政治問題が発生したときは，国民各層の代表を一堂に集める国民対話集会を開催し，各代表の意見の表明を数日にわたって聞いたのち，裁定を下すという方式を彼は好んで用いた。

おわりに

1月10日から連日の，各県の代表団のヤムスクロ弔問で始まったウフエ・ボワニの大葬儀は，2月7日，いよいよクライマックスを迎えた。この日，ヤムスクロのサバンナの原野に聳え立つ平和ノートルダム寺院，ウフエ・ボワニが私財400億CFAフラン（約200億円）を投じて建立したとされているこの通称バジリックで鎮魂ミサが行なわれた。フランスのミッテラン大統領，バラデュール首相，ジスカール・デスタン前大統領，シラク・パリ市長らが名を連ねた80名からなるフランス代表団をはじめ，国家元首24名を含む各国の代表団がこのミサに列席した。

ギニアのセク・トゥーレが「富裕の中の隷属よりも貧困の中の自由」を選択してフランスと訣別していったのに対し，「飢えたるものに自由はない」とあえてフランス協調路線を歩んできたウフエ・ボワニは，フランスにとっては80名の大弔問団に値するかけがえのないフランスとアフリカの架け橋であったにちがいない。ひとつの時代が終わった。

（はらぐち・たけひこ／アフリカ総合研究プロジェクトチーム・コーディネーター）

年　譜

1905　(10.18)ヤムスクロに生まれる。
1915　バンジェールヴィル中学校入学。
?　カトリックの洗礼をうける。
1922　ダカールのWilliam Ponty校入学。
?　ダカール医学校転入。
1925　「補助医」の資格を取得し帰国，アビジャン中央病院勤務。
1926　ギグロに転勤。
1928　アバングルに転勤。
?　セネガル人商人El Hadi Racin Sow の娘Kadiと結婚（4男1女をなす）。
1938　母と弟（Akoué首長）死去。Akoué首長，Canton長に就任。
1944　アフリカ人農業組合結成。組合長に就任。
1945　(10.22)フランス制憲議会コートジボワール選出議員に当選，初めて渡仏。
1946　「ウフエ・ボワニ法」（植民地における強制労働制度の廃止），フランス議会で成立。
(10.18)バマコでRDA（アフリカ民主連合）結成大会，初代総裁に選出される。
1950　(1.29)ディンボクロ事件，ウフエ・ボワニ殺害の噂が流布，民衆のデモで死者13名負傷者60名。
1951　ミッテラン海外相のアビジャン訪問，ウフエ・ボワニと会談，ウフエ＝ミッテラン協定成立，RDA，フランス共産党と訣別。
1954　フランス国民議会議員に当選。
1956　Mollet内閣に入閣，以来59年まで6代のフランス内閣で閣僚をつとめる。
1959　コートジボワール（自治国）首相に就任。
1960　(8.7)コートジボワール独立，初代大統領に就任。
1965　大統領選挙で再選。
1970　大統領選挙で3選，ナイジェリア内戦でビアフラ支持。
1975　大統領選挙で4選，Dona Fologo情報相を特使として南アに派遣。
1980　大統領選挙で5選。
1985　大統領選挙で6選，得票率100%。
1990　複数政党制下の初の大統領選挙で7選（得票率81.7%）。
1993　(12.7) 死去。
1994　(2.7)ヤムスクロで大葬儀，埋葬。